から、資産の乏しい農民は、機械化された大農場經營者との競爭に勝ち得ないことは當然であり、貧しい小作勞働者に轉落せざるを得ないのであつて、かくしてアメリカでは機械化を通じて大經營がふえ、土地の集中がますます行われることゝなる。

以上に於て細野氏の論旨の一端を不充分ながら紹介したのであるが、要するにアメリカ農業は機械化によつて尨大な生産力を獲得し、國民にあり餘る食糧と原料を供給した。しかし前述の如く、トラクターを裝備し得ない農家は全農家の三分の二に達し、これに對して最高の機械力を有し、さらに全雇傭勞働者の四分の一を使役して大量の生産物を市場に供給する「工場農場」さえ存在する。このような大農場になれば、機械力を充分利用して生産費を低下せしめ、農産物價格の下落に對抗することが出來るが、小農は生産力と需要の不均衡に苦しめられつゝも、他産業に就職の機會を見出し得ないために農業に止り、農村の階層分化は機械化の進展に伴つて却つて加速化されている。こゝにアメリカ農業に於ける資本主義化の典型的な事例を見出し得るのである。

（織田武雄）

田中耕太郎「ラテン・アメリカ史概説」

田中耕太郎氏の「ラテン・アメリカ史概説」上下二卷をよんで感じたことを少しかき綴つてみたいとおもう。

氏はこの書を「啓蒙的な入門書」といつているが、「ラテン・アメリカ紀行」（昭和十五年刊）以來約十年をかけた勞作であるだけに單なる入門書以上のもので、西洋史をまなぶものゝ一度は熟讀すべき書である。ただ限られた分量に充實した内容がもられているので、決してよみやすい書であるとはいえない。そして從來の概説書によくみられたことでもあり、またラテン・アメリカ史の性格上やむを得ないことでもあろうが、氏の概説も主として政治史である。歴史の他の側面、經濟・社會・文化などは政治に附隨してふれられている感が深い。（宗教だけはやゝ詳しい。）また附録の「ラテン・アメリカに對する佛蘭西文化の影響」は文化の面を補つているが、主題の關係上叙述が偏つている。

氏の叙述は精確公正で、氏の立場も本文では餘り表面にでていない。だが序にのべられていることを頭において氏のアクセントに注意しながらよむと、氏の立場がかなりはつきりうかびあがつてくる。つまり氏は、歴史から「最も適切な教訓を汲み取」（上・序・三）ろうとしている。氏は、人民の政治的訓練の缺如という點ではラテン・アメリカも我が國も餘りちがわないとされ（上・序・五）、從つてラテン・アメリカ史の研究が「日本の政治の改善及び文化の向上に何等かの意味で役立つに違いないと云う確信」（上・序・六）をもつている。そして帝制下のブラジルが他の諸共和國より「遥によく國内的秩序を保ち、平和と繁榮を享受した」（上・序・四）といゝこれが「我が國に於ける天皇制の存在理由の理論的基礎付けに役立つ」（上・序・四）とのべている。

さて植民地時代で田中氏が重視するのは

「西班牙本國のカトリック諸王達のクリスト教的人道主義に基く植民地統治の政策、當時として驚くべく進歩していたところの「印度法」中の、インディアン保護の勞働立法」（上・序・三）である。だが本國の家長的・抑制的な政策が植民地人の政治的・經濟的・文化的な自由を抑壓したことは、みとめなければならないだろう。（Wilgus and d'Eca, Outline-History of Latin America, XVII）氏は植民地の「秩序維持と植民地人の福祉」（上・一三一）に役立つた面も力説しているが、植民地の搾取を强調すべきではなかろうか。またインディアン保護にしても、その「善意」が利益（例えば貴金屬獲得）の前には顧られなかつた面（上・一九三）、インディアンの奴隷化がさけられなかつた面（上・一四五）にもつとアクセントをおくべきではなかろうか。

氏はイエズス會の「インディアン保護の活動」をたかく評價し、その效果を「全く無から有を生ぜしめた奇蹟的なもの」（上・一七九）とたゝえている。だが結局この教團が、インディアン勞働によつて富んで世俗化し、貿易に從事し、インディアン軍隊を組織し、植民地政府に脅威をあたえた事實（Wilgus and d'Eca, op. cit., p. 92）は、あまりふれられていない。イエズス會の追放の主な原因は、この事實にあるので、氏のいうように（上・二二一）その人道的活動と政府の利害との對立にあるのではない。

次に獨立後の「各共和國の歴史は無政府と獨裁との交替に外ならぬこと」（上・序・三）は田中氏のいうとおりであらう。だがその窮極の責任を人民の政治的訓練の不足に歸するのは、果してどうであろうか。むしろ歴史的・地理的・社會的なハンディキャップを克服しようとする彼らのあがきに注目すべきではなかろうか（Wilgus and d'Eca, op. cit., p. 133）。

これらの共和國に對比して帝制下のブラジルの秩序と平和と繁榮が强調されている。だがそれはペードロ二世の人格と人民の自治能力の成長によるのである。（Wilgus and d'Eca, op. cit., p. 365）制度のみの功でないことは、ペードロ一世の治政の失敗によつて立證されているといえないだろうか。

要するにラテン・アメリカ史中で田中氏の興味をひいたのは、植民地時代ではカトリック諸王の「開明的專制主義」（上・二〇七）とイエズス會の「溫情的專制主義」（上・一七一）、獨立以後では帝制ブラジルや啓蒙的獨裁者たちの「道德の專制政治」（下・二九四）にほかならなかつた。エクアドールの「道德的專制者」がルシーア・モレーノの理想である「德行、信仰及び秩序」（下・一七五）は結局田中氏自身の理想なのであろうし、この理想のためには獨裁もまた「止むを得ない」（下・一七六）といわれるのである。たしかに、專制獨裁は政治的訓練のない人民に「最小限度の要求たる秩序」をもたらし、啓蒙的な專制獨裁は「人民の福祉」をもたらすものでもあろう（下・七二）。だが田中氏自身インカ帝國の庶民階級について次のようにいつている。「假令生活の安定が保證せられてゐても、大きな社會的機構の一局部的役割

即ち勞働蜂の仕事を分擔するものであり、人格の價値や積極的な意味での個人の文化への貢獻の餘地は全然存在しなかつた」（上・五二）と。そして彼らもまた秩序と平和と繁榮とを享受していたのである。だがこのようなインカの庶民階級と獨裁專制の下でのラテン・アメリカ諸國の人民とは大同小異ではなかろうか。そしてこのような社會は、果してのぞましいものなのであろうか。（一九五〇・三・二〇—K・H）

（岩波書店刊行、田中耕太郎著、ラテン・アメリカ史概說、上卷—昭和二十四年八月發行、下卷—昭和二十四年十二月發行）

自然史學會編
原始時代の生活
——太古の人類と文化——

この四五年の間に、人類學考古學系統の知識を求める世の要望にこたえて、續々と刊行された啓蒙的な概說書のうちには、一般讀者の此の方面に關する無知と、自分の知らないことを教えねばならない小學校・中學校の先生方の、藁でもつかみたいような心理とに乘じた杜撰なものも少くはなかつた。其の間にあつて、自然史學會編「原始時代の生活は」、この種の書物に對する需要がやゝ下火となり、經濟情勢もインフレ期をすぎて、質に對する吟味が嚴重となつた昨今に至つて漸く出版されただけあつて、內容には苦心經營の跡が見られ、編纂者もかなりの自信を持つて本書を世に送られたようである。

この書は「あとがき」にも明記してあるように、もと〳〵小學校社會科の教科書「大むかしの人々」の指導參考書として企畫されたもので、其の構成は概ね教科書の次第にしたがつている。

本書の構成を簡單に述べると、第一篇總論は人類學研究の意義と方法を略述した後人類の自然史と文化發展の原理について夫々一章を設け、後者では民族學の理論をやゝくわしく紹介して、未開人の精神生活についても平易な說明を試みている。次の第二篇は原始人の物質生活を利器・容器・火の利用・衣服・住居・生業に分ち、各々について主としてヨーロッパの例を用いて解說を加えており、特に環境の生活に對する制約牧畜農耕の起源の說明に力を注いでいる。最後の第三篇は我々に身近な日本の原始時代の解說にあてられ、簡潔にして要を得た日本考古學概說と稱してよい。以上の三篇うち第一篇が教科書の最初の部分に當り、第二篇第三篇が夫々教科書の二、大むかしの人々三、私たちのそせんはどんな生活をしていたかに對應するわけであるが、本書が一應一般向の人類學概說書としての體裁をとつているため、教科書の內容からかなり離れた敍述も隨處に見られる。ことに第一篇は教科書がきわめて簡略にすましていることの說明に多數の頁を割き、教科書が全くふれていない人類の自然史に關する一章を挿入して、自然人類學と文化人類學にまたがる廣い意味の人類學概說書の序論たり得る內容を持つている。これに對し以下の二篇は社會科の指導參考書としての當初の企畫を忠實に守つて、原始時代の物質生活の說明を主とする教科書の內容に即した敍述をしているので、物質生活以外の面が等

潤に附せられており、第一篇との均衡を失した感がある。從つて本書は社會科の指導參考書としては十分の內容を持つているが、一般讀者を對象とした人類學の概說書としてはいさゝか尻すぼみの評をまぬがれない。ただし其の責は著者よりも、二兎を追はんとした企畫に歸せらるべきであつて、もし著者をして教科書にかゝわりなく、人類學の概說書を書かせたならば、後半は此の書物と全く異なつたものとなつたに違いない。むしろ著者に關しては、かゝる制限を受けながらも廣い範圍にわたる知識を巧妙にまとめ上げた手ぎはよさを高く評價すべきであろう。

大體一つの學問の全分野が均等に發達することはまれであつて、非常に詳細をきわめている部分がある反面、全く未解決の問題が多く殘されているのが普通である。また今日の極度に分化した學問のうちにあつて、一人の人間が一つの學問の全體に通曉することは至難の業である。概說書の著者は右のような學史的・個人的な制約を克服して、全體を一つのまとまつた姿にまで構成しなければならないのであつて、其の爲にはすぐれた專門家たるに必要な才能とは別種の才能を要する。本書の著者は此の點に關するかぎり、概說書の著者に必要な資格をそなえておられるようで、現在の學問や著者自身の知識の間隙をたくみに埋め、或は迂回しながらまとめられた手ぎわは美事なものである。あるいはまた、本書の大部分を執筆された岡田芳三郎氏が本書の內容と直接關係のない中國の考古學を專攻された人であるため、かえつて細部にこだわらない廣い展望が得られたとも言えよう。

また著者は概說書ことに本書の樣な若い人々や小學校の先生方を對象とした書物に必要である、平易な表現にも才能を持つておられるようである。本書の平明さは何よりもます著者自身の理解の深さによるのであるが、また自身の理解していないことを無理に書かない著者の愼重さにももとずいている。其の爲本書には著者自身の理解不足による難解さが全く無く、擧足をとられるような個所もきわめて少い。しかも其の行文はやさしい言葉をもつて思考の速度に合せてつゞられており、一讀して思索に長けた人の手に成ることを思わすものがある。

なお最後に本書の價値を著しく高めているものに、其の豐富な挿圖のあることを忘れてはならない。遺跡遺物の解說に重點を置く本書に挿繪の缺くべからざることは言うまでもないが、其の作成に費された勞力は文獻資料ばかりを取扱つている方々には到底想像も出來ない程のものである。殊に本書は細部の不鮮明になり勝な寫眞版をさけて、全部ペン畫に畫き直すという、最も親切であるが最も困難な途を選んでいる。製圖の出來ばえも他の類書に比を見ないもので、幾分素人くさい所のあるのは、其の大部分が著者によつて畫かれた爲であり、其の爲に拂われた努力には敬服の他ない。最後に記して敬意を表する所以である。

昭和二十五年二月四日　群芳圖B5　三三〇頁　定價二三〇圓　（横山浩一）